

学生の死生観 —— 看護科学生の入学時における死のイメージ ——

川崎医療短期大学 第一看護科

初鹿真由美 關戸 啓子 渡邊ふみ子
太湯 好子 杉田 明子 酒井 恒美

(平成4年8月24日受理)

Students' Views about Life and Death — Images of Death Held by Nursing Students at their Admission —

Mayumi HATSUSHIKA, Keiko SEKIDO, Fumiko WATANABE
Yoshiko FUTOUYU, Akiko SUGITA and Tsunemi SAKAI

*Department of Nursing
Kawasaki College of Allied Health Professions
Kurashiki, Okayama 701-01, Japan
(Received on Aug. 24, 1992)*

Key words : 死, イメージ, 看護科学生

はじめに

入学後間もない看護科学生を対象に、死に対するイメージを把握し、またそれに及ぼす諸要因の影響を検討するためにアンケート調査を行った。

死のイメージは因子分析によって、暗さと怖さの2面があることがわかった。そして、暗さは怖さよりも強くイメージされていた。この2通りのイメージそれぞれに関与する要因を数量化理論によって検討した。その結果、「信仰する宗教がなく来世を信じない」、「迷信を常に受け入れる」は、死の暗さ、怖さの両方のイメージを著明に強め、逆に「信仰する宗教がある」は、その両方を弱める属性になっていることがみられた。また、怖さのイメージを著明に弱めている属性としては、「迷信は常に批判的」があげられた。その他いくつかの要因の関与が認められた。

I. はじめに

看護婦にとって、終末期の患者に対する援助は避けて通ることのできない職務であり、患者の死に臨んで他者の死をも主観化することのできる能力を備えていることは、極めて大切であると思われる。山本¹⁾は、「臨床の場で患者の死を主観化できる能力を備えるには、先ず自己の死の主観化を完了させておかなければならない。もし、自己の死の主観化が未完成のうちに他者の死の主観化を強要された場合には、本人はそれをどう受けとめてよいか分からず、混乱に陥ったり、

燃え尽き状態になったりすることが少なくない。」と述べている。人は mortal な存在であり、誰もそこから逃れることはできず、死は絶対的なものだという考えを自分がしっかり持つておかなければ、終末期患者の援助は難しいということである。看護婦を目指す看護学生のこのような能力は、看護教育・臨床実習の過程でどのように培われていくのであろうか。そのような意図から、本報ではまず、入学直後の看護科学生を対象として、死に対するイメージを把握し、次いでそれに及ぼす諸要因の影響を検討するための調査を行い、若干の知見が得られたので報告する。

表1 死のイメージに関する各質問の因子負荷量

	質 問					因子負荷量	固有値	累積寄与率 (%)
	5 そ う 思 う	4 ど ち ら か と い う	3 ど ち ら と も	2 ど ち ら か と い う	1 (点) そ う 思 う			
第1因子： 暗さ	①美しさ				醜い	-0.323	2.49	24.9
	③暗い				明るい	0.810		
	⑤冷たい				暖かい	0.603		
	⑥嫌い				好き	0.578		
	⑦静的				動的	0.569		
第2因子： 怖さ	②開放的				閉鎖的	-0.492	1.01	35.0
	④穏やか				激しい	-0.609		
	⑧怖くない				怖い	-0.332		
	⑨苦痛				安楽	0.548		
	⑩自然				不自然	-0.443		

II. 研究方法

1. 調査対象と調査時期

K短大3年課程の看護科1年生（以下、1Nと記す）59名及び2年課程の看護科1年生（以下、2Nと記す）58名と対象として、1992年4月に調査を実施した。

2. 調査方法

死に対するイメージ及びそれへの影響が予想される諸要因についてのアンケート調査を行った。死に対するイメージの調査は、10項目の対をなす質問を設け、5選択肢について回答を求めて、それぞれの回答に5～1点を配した（表1参照）。有効回答は109名（回収率93.2%）から得られた。

3. 調査結果の解析方法

因子分析は主因子法（ヤコビ法）・バリマックス回転法により実施した。因子の解釈は、固有値が1.0以上の因子について行った。要因の影響の解析は、数量化理論第1類²⁾を使用した。

III. 成 績

1. 看護科学生の死に対するイメージの構造

死に対するイメージとして取り上げた10項目の質問に対する回答を因子分析した結果は、表1に示すように、2因子が抽出された。第1因

表2 死に対するイメージの因子別得点

	平均値±標準偏差	t 検定
暗さのイメージ	3.93±0.58	**
怖さのイメージ	2.92±0.69	

注 **：p<0.01

子は暗さのイメージ、第2因子は怖さのイメージと解釈した。データの構造についての信頼性は、Cronbachの α 係数が質問全体：0.82、第1因子：0.82、第2因子：0.72、ではほぼ満足できるものであった。

各因子に属す質問の得点（因子負荷量が負の値を示した質問の回答に対する配点は、5～1点のそれぞれを1～5点に置き換えた。）の平均値を因子別得点とし、全被験者について求めたそれぞれの因子別得点の平均値±標準偏差は表2のとおりである。暗さのイメージの平均得点は、暗いととらえる側にあり、一方怖さのイメージの平均得点はどちらともいえないととらえている位置にあって、両者の間には有意の差が認められた。すなわち、暗さは怖さより強くイメージされているといえる。

2. 看護科学生の死に対する暗さのイメージに及ぼす諸要因の影響

死に対する暗さのイメージの得点を外的基準

表3 死に対するイメージの因子別得点

要 因	カ テ ゴ リ ー	人数
I-1: 信仰の有無	C-1: 信仰する宗教がある	13
	C-2: 信仰する宗教はないが、来世を信じる	69
	C-3: 来世を信じない	27
I-2: 迷信を受け入れるかどうか	C-1: 常に受け入れる	14
	C-2: たまに受け入れる	86
	C-3: 常に批判的	9
I-3: 肉親の死の瞬間に遭遇した体験	C-1: ある	76
	C-2: ない	33
I-4: 友人、知人の死の瞬間に遭遇した体験	C-1: ある	33
	C-2: ない	76
I-5: 死について親と話し合った経験	C-1: ある	49
	C-2: ない	60
I-6: 死について友人と話し合った経験	C-1: ある	44
	C-2: ない	65
I-7: 亡くなった人に行われる儀礼的行為の知識	C-1: よく知っている	83
	C-2: あまりよく知らない	26
I-8: 家族と墓参り	C-1: 行く	85
	C-2: 行かない	24
I-9: 葬式に参列の体験	C-1: ある	98
	C-2: ない	11
I-10: サスペンスドラマの好き嫌い	C-1: 好き	79
	C-2: 嫌い	30
I-11: ホラー映画の好き嫌い	C-1: 好き	59
	C-2: 嫌い	50
I-12: 教育課程	C-1: 第1看護科1年生(1N)	56
	C-2: 第2看護科1年生(2N)	53

表4 死に対するイメージの因子別得点

要 因	暗さに関するイメージ	怖さに関するイメージ
I-1: 信仰の有無	0.267 (0.568)	0.275 (0.649)
I-2: 迷信を受け入れるかどうか	0.169 (0.297)	0.423 (1.252)
I-3: 肉親の死の瞬間に遭遇した体験	0.044 (0.060)	0.111 (0.169)
I-4: 友人、知人の死の瞬間に遭遇した体験	0.068 (0.086)	0.052 (0.071)
I-5: 死について親と話し合った経験	0.057 (0.065)	0.297 (0.381)
I-6: 死について友人と話し合った経験	0.077 (0.089)	0.003 (0.004)
I-7: 亡くなった人に行われる儀礼的行為の知識	0.118 (0.189)	0.061 (0.104)
I-8: 家族と墓参り	0.114 (0.154)	0.171 (0.251)
I-9: 葬式に参列の体験	0.003 (0.005)	0.006 (0.013)
I-10: サスペンスドラマの好き嫌い	0.057 (0.075)	0.102 (0.145)
I-11: ホラー映画の好き嫌い	0.226 (0.280)	0.234 (0.315)
I-12: 教育課程	0.186 (0.244)	0.077 (0.107)

注 () 内の数字はレンジを示す

とし、表3に示す12要因の影響を数量化理論第1類によって解析した。要因I-3の肉親には両親、兄弟、祖父母、おじおばが含まれる。I-7の亡くなった人に行われる儀礼的行為としては、亡くなった人をきれいにする時に使用する温湯は水に湯を注いで準備する、着物は右前身頃を上にして左前にする、手は胸元で合掌させるかまたは組ませる、着物の紐は縦結びにする、死化粧をする、亡くなった人を北枕にする、末期の水を捧げる、神道による儀式では参列者は手水を使う、の8項目を取り上げ、知らない項目が3つ以下の場合を「よく知っている」、4つ以上の場合を「あまりよく知らない」と分類した。

暗さのイメージの得点と各要因との偏相関係数及び各要因の重み値のレンジは表4に示すとおりである。死に対する暗さのイメージには、I-1: 信仰の有無が最も大きな寄与を持ち、次いで、I-11: ホラー映画の好き嫌い、I-12: 教育課程、I-2: 迷信を受け入れるかどうか、I-7: 亡くなった人に行われる儀礼的

行為の知識、I-8: 家族と墓参りなどが影響をもっていることが認められた。図1はそれらの要因について、各カテゴリーの重み値を示したものである。暗さのイメージを強めている個人の属性として、その度合の大きい順に迷信を常に受け入れる、信仰をする宗教がなく来世を信じない、ホラー映画は嫌い、1Nなどがあげられた。逆に暗さのイメージを弱めている個人の属性として、信仰する宗教がある、亡くなった人に行われる儀礼的行為はあまりよく知らない、ホラー映画は好き、2N、家族と墓参りには行かないなどがあげられた。

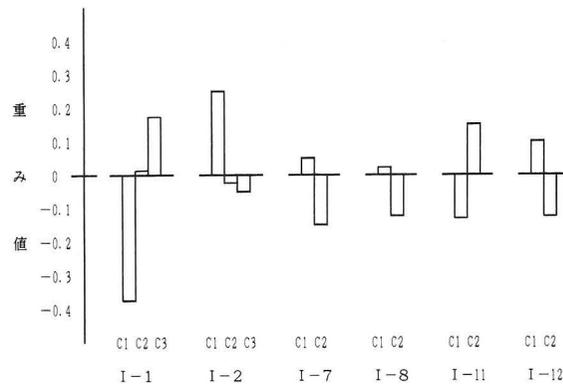
3. 看護科学生の死に対する怖さのイメージに及ぼす諸要因の影響

死に対する怖さのイメージの得点を外的基準とし、暗さのイメージと同様に表3に示した12要因の影響を数量化理論第1類によって解析した。

怖さのイメージの得点と各要因との偏相関係数及び各要因の重み値のレンジは表4のとおりである。死に対する怖さのイメージには、I-

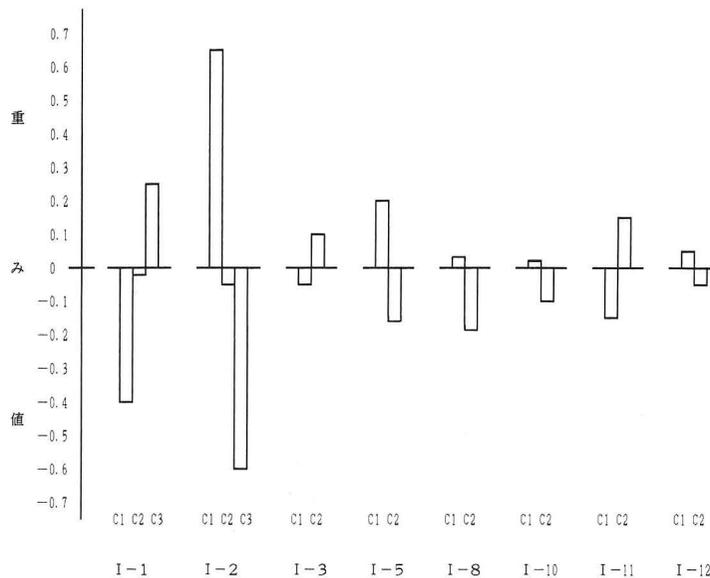
2：迷信を受け入れるかどうか最も大きな寄与を持ち、次いで、I-5：死について親と話し合った経験の有無，I-1：信仰の有無，I-11：ホラー映画の好き嫌い，I-8：家族と墓参り，I-3：肉親の死の瞬間に遭遇した体験の有無，I-10：サスペンスドラマの好き嫌いなどが影響をもっていることが認められた。図2はそれらの要因について、各カテゴリーの重み値を示したものである。怖さのイメージを

強めている個人の属性として、その度合の大きい順に迷信を常に受け入れる、信仰をする宗教がなく来世を信じない、死について親と話し合った経験がある、ホラー映画が嫌い、肉親の死の瞬間に遭遇した体験がないことがあげられた。逆に怖さのイメージを弱めている個人の属性として、迷信は常に批判的、信仰する宗教がある、家族と墓参りは行かない、死について親と話し合った経験がない、サスペンスドラマが嫌いな



注 カテゴリーは表3参照、重み値が+のカテゴリーはその絶対値が大きいほどイメージを強める方に引っ張り、-のカテゴリーはその逆にイメージを弱める方に引っ張ることを示す

図1 暗さのイメージに及ぼす諸要因の影響



注 図1に同じ

図2 怖さのイメージに及ぼす諸要因の影響

どがあげられた。

Ⅳ. 考 察

キューブラー・ロス³⁾は、「死はいまなお、恐ろしい、怖い出来事であり、死の恐怖はわれわれが多く段階でそれを克服したと思ひこんでいるにもかかわらず、依然として人間共通の感情である。」と述べている。死は、人にとって避けられないものである。しかし、それがわかっていても死は未知なるものであり、死への恐怖感を取り除くことは出来ないということである。現代社会においては、毎日のように報道される事故、戦争、暴動、さらに犯罪などによる人の死を耳目にしているとはいえ、それは他人のことであって我が身にとって、死は遠く未知なるものである。

本報ではまず、看護科学生の死に対するイメージについて、10項目の質問の回答を因子分析した結果、暗さと怖さの2面があることがわかった。その強さを比較すると、怖さよりも暗さを強くイメージしていた。死を客観的にとらえる意識が強いということかもしれない。

次に、死の暗さあるいは怖さのイメージに影響を及ぼしている属性について考察してみる。

信仰する宗教があり、来世を信じるならば、死の暗さも怖さも払拭されるのだろうかとの考えから、信仰の有無が強く寄与していたことは、理解しやすい。

迷信を受け入れるかどうかに関連して、山本⁴⁾は、「日本人には固有の死生観として、死後の人間は霊として存在し、これには善い霊の祖霊と悪い霊の怨霊があり、怨霊を粗略に扱おうと『たたり』をもたらすと信じられた。」と述べている。このような考えから、たたりを恐れて迷信を信ずるようになったり、霊に対する恐怖感が生じてくるのではないのだろうか。そこで、迷信を受け入れる者が、死に対してより暗く、より怖いイメージを抱くようになることがうなづける。

肉親の死の瞬間に遭遇した経験について谷⁵⁾は、死を怖いと感じている者は60歳以上では3.2%であったのに対して、短大生では37.8%と極めて高率であったと述べている。人の死を直視する体験の少ない若い学生では、死そのものへの恐怖が強いことを示していると考えられる。本調査で

は、肉親の死の瞬間に遭遇した体験が、怖さのイメージを強めていることと符合した。本調査の怖さのイメージに対する得点で「どちらかという怖い」に相当する者は15.2%であり、谷による短大生より低率であるが、60歳以上の者よりもかなり高率であった。

死について親と話し合った経験は、怖さのイメージを強めていた。これは、親が子供に死について話をする時、親自身が死を忌み嫌い、けがれとみていることと関連があり、死そのものを語るのではなく、むしろ、幽霊、火の玉など怪談として語る親の態度が影響しているのではと推察できる。

「亡くなった人に行われる儀礼的行為の知識」の有無、また「家族と墓参り」に行くかどうかは、「迷信を受け入れるかどうか」という項目と共通するように思われる。迷信に批判的な学生では、儀礼的行為に関心は薄く、墓参りにも行かないだろう。したがって、前述した理由に基づいて、これらの要因が死の暗さあるいは怖さのイメージに影響を及ぼしていると思われる。

サスペンスドラマとホラー映画の好き嫌いが怖さのイメージに及ぼす影響には、共通するものがあると考えたが、相反する影響がみられた。回答した学生が、サスペンスドラマとホラー映画にどのような共通項と違いを見出だしているか、またどのような点で好き嫌いとは反応したかなど、今後検討していきたい。強いて推測するならば、現実性のあるサスペンスドラマには推理することへの興味から、暗さより怖さに誘われる。したがってそれが好きであることが死の怖さのイメージを強くする属性となっているのかもしれない。これに反して、非現実的色彩の強いホラー映画では、それに興味をもち馴染むに従い、暗さ、怖さに誘われる対象にも平気でいられるようになり、それが好きであることが人の死の怖さのイメージも弱くする属性となっているのかもしれない。

教育課程の違いが死の暗さ及び怖さのイメージに及ぼす影響は、2Nの学生では死にゆく患者の看護を既に学んでおり、また病院実習においても患者の死に遭遇した学生がいることから、得られた結果は当然なことといえるかもしれない。

V. おわりに

看護婦の役割の中で、臨死患者に対する看護は重要な位置を占めており、看護基礎教育においても臨死患者への看護を教育することは重要である。人間にとって、死は生まれた時から逃れることのできないものであり、人の死との真剣な対応は看護婦にとって避けて通ることのできない課題である。

今回、調査の対象とした学生は、看護を志して入学したのであるが、死を現実のものとして受け止めた経験をもつ者は少なく、「死」という言葉から漠然とした死を「自分の死」に関連づけてイメージしたように思われる。今後の看護基礎教育を通して、死に対するイメージがどう変化し、死を主観化できる能力がどのように培われてゆくのか、同一学生を入学時から卒業時まで経時的に調査し、学生指導の参考として活用したい。

文 献

- 1) 山本俊一：死生学のすすめ, p 21, 医学書院, 東京 (1992)
- 2) 古川俊之, 田中 博：多変量解析プログラムパッケージ入門, 83-101; 128-150, 医学書院, 東京 (1983)
- 3) キューブラー・ロス (川口正吉訳)：死ぬ瞬間, p 17, 読売新聞社, 東京 (1978)
- 4) 山本俊一：前掲書1), p 44
- 5) 谷嘉代子：生と終末期の意識—「生と死を考える会」の調査から, 看護展望, 10(9), 34-40 (1985)
- 6) 菊池登喜子他：死のイメージとその関連要因についての因子分析—看護学生を対象とした質問紙調査紙による研究, 看護展望, 11(6), 34-44 (1986)
- 7) 藤井博英他：秋田県の看護学生の死のイメージに関する考察—2年課程と3年課程の差異を中心として, 看護教育, 30(2), 105-109 (1989)